

○編者曰く、獨立不羈を貴ぶ人は、洋の東西に論なく、行ひ其授を一にす、我國史學の大家、頼山陽の自主の精神と、佛國トクウイールの門地を耻ぢしとは、何れも獨立不羈の精神によらずんばならず、山陽清介自ら居り、權貴の門に趨走するを耻ぢ、諸侯の聘、固辭して應ぜず、常に著作講述に努め、眼中貴賤なく、貧富なきの大見識は、一世の仰視する所なりき、トクウイールは、爵位ある家に生れ、早歳高官に上りしが、父祖の餘澤により、重任を荷ふは、耻づべきの甚しと爲し、將來自己の力により、榮達を得んものと、官を抛ちて、異郷の客と爲り、有名の書を著せりと云ふ。

(71)活 識

熊澤伯繼

治水

杜預

架橋

○備前少將池田光政、熊澤伯繼字は蕃山を拔擢して、國政を委す。蕃山の政を爲すや、近效の小利を務めず、其施設する所、愈々久うして、愈效あり、備前の地、山を負ひ

て、海に面す、三野川、南流して、海に注ぎ、夏秋の間、泛溢する多し、蕃山渠を穿ち、閘門を作り、早勞に随つて、開閉せしめ、水患長く絶ゆ、蕃山妙に水利を解し、其溝瀆を通じ、堤防を築くや、馬に跨つて巡視し、方略を授く、胥吏指揮を承けて役を興し、始より思量を費さざる者の如し、其術に老練なる者歎服し、及ばずと爲す、人問ふ者あれば、便ち曰ふ、吾の水を治むるは、民の其土に生ずる者と、吏の其事に諳熟する者とに若かず、吾は人の善を取るのみと、嘗て曰ふ、民間木を伐る、節なければ、水源枯槁し、西潦の暴漲、歳としてこれなきはなし、國に山林川澤の政なければ、以て天地の化育を賛すべからずと、是に於て一法を撰み、厲禁を設け、定めて藩憲と爲す。

○晋の杜預は、京兆、杜陵の人なり、博學多通、興廢の道に明かに、常に言ふ、徳は以て企て及ぶべからざるも、功を立て、言を立つることは、庶幾すべしと、預、孟津の渡危険にして、覆没の禍患屢々なるを以て、河橋を富平津に建てんと請ふ、議者思

へらく、古昔より橋を造らざるは、必ず造るべからざるが改なり、預曰ふ、舟を造り
梁と爲さば則ち河橋の謂ひなり、橋成るに及び、帝、百僚を従へ臨會し、鴈を擧げ、
預に屬して曰ふ、君に非んば、此橋成らずと、對へて曰ふ、陛下の明にあらずんば、
臣も亦微功を施すことを得ずと。

○編者曰く、我國、漢學者中、詩を賦し、文を作り、經義を講ずる等、この範圍内
に、局促せし世に在つて、嶄然として頭角を抽んで、腐儒の群を脱し、活學者の
魁を爲せし者、熊澤蕃山を推さざるべからず、藩山、池田光政公に仕へ、國政に
參與するや、近效の利は、措いて問はず、力めて永遠の大利を計圖し、特に意を
山林川澤の政に用ひ、施設する所多し、其山林濫伐より、水源枯渴し、雨潦暴漲
の害を憂ふるや、科學の智識に富める今日の學說と、恰も符節を合せるが如きを
見れば、其卓識之士たるを推尊せざるを得ず、晋の杜預の舟橋を造つて、衆庶の
利便を圖りしは、漢土學者中、稀に見るの擧、稱すべし。

(72)致富

河村瑞軒

致富

范蠡ハシレイ

富豪

○河村瑞軒は、河戸の人、年少車力を業とし、常に人に雇役せらる、慧敏にして機才
あり、嘗て其不遇を歎じ、京坂に轉じて爲す所あらんとす、乃ち什器を鬻ぎて、金三
兩を得以て行く、小田原に宿して、一老翁に遇ひ、其志を語るに、翁其行を止めて曰
ふ、江戸は將軍の居城にして、天下の人物輻湊し、物として備はらざるなし、男兒苟
も志を立つ、宜しく此の如き地に居るべし、若しこの地に在つて、爲す所なくんば、
何くに往いてか、爲すあるを得んやと、且つ其骨相の有望なるを諭す、瑞軒、之を聽
き感奮し、翻然として志を改め、轉じて品川に來る、時、孟蘭盆會に際し、祭供の
瓜、茄子を棄てたるもの、河川を覆うて流れ下る、瑞軒、錢を乞兒に與へて、之を拾
はしめ、集めて糠漬として、之を賣りしに、公事土工の人夫等、争つて之を買ひ、大
利を得たり、且つ監督の小吏に知られて、入夫長となり、幾何もなく、大利を得て、

邸宅を起し、多く婢僕を養ひ、屢々宴を張つて衆を饗し、豪快自ら喜び、散財少しも顧慮する所なし、偶々明暦の大火あり、瑞軒、出火の初に當り、審に地勢風向を察し、其火災の大なるべきを察し、金二十兩を懐にして、去つて甲信に赴き、材木商の大なる者に、悉く手付金を打つて約を爲し、木材に烙印を施し搬出せしむ、果して江戸の大部分、灰燼と爲り、材木の價暴騰して、大利を得しこと算なし、時人瑞軒を大山師と呼ぶ、後世投機者流を稱して、山師と稱するは、此時に始まりしと云ふ、瑞軒、大に門戸を張り、聲望一時に高く、交友頗る多し、學を好んで多く書を藏し、地理に精しく、事物の大體に通じ、事を未然に察して、中らざるなし、終に幕府に登用せられて、百五十俵を賜ふ、命を受けて、奥羽江戸間の航路を整理し、難破の憂を除き、又大坂の安治川を治めて功あり、後、淀川、長柄川、中津川等を治めて、氾濫の患なからしめたりと。

○史記に、范蠡は、越王勾踐に事へ、身を苦め力を戮せ、勾踐と深く謀り、三十餘年、竟に吳を滅して、會稽の耻を報ず、思へらく、大名の下には、以て久しく居り難し、且つ勾踐は、與に患難を同らすべきも、與に安樂に居るべからずと、乃ち其輕寶珠玉を裝し、家族従僕と舟に乗じて海上に浮び、越を去りて終に反らず、齊國に行き姓名を變じて、隠れて海邊に耕し、父子産を致すこと數千萬、齊人其賢を聞き、以て相と爲す、蠡歎じて曰ふ、家に居つては、千金を致し、官に居つては、卿相に至る、これ布衣の極なり、乃ち相の印を返して、悉く其財を散じ、郷黨知友に分與し、其重寶を懐き、間行して去れり、陶に止り、思へらく、これ天下の中央、有無を交易するの路通ず、以て富を致すべしと、居ること幾ばくもなく、貲を致し、巨萬を累ぬ。天下陶朱公と稱す、范蠡三たび移り名を天下に成せり、陶に老死すと云ふ。

○編者曰く、富を致すの術は、機を見るに敏に、其機會を捉ふるや、電光石火も嘗ならず、勇斷果決、寸時の猶豫なく、大膽の行動を敢てし、憚らざるもの、如し、河村瑞軒の途に、盆供養の廢物、瓜茄子等、河川を覆うて下るを見、之が利

用法に考案を下し、咄嗟に空囊を充たし、小資本を得たるを始めとし、明曆の火事に、地勢風向を察して、延焼大火ならんと決断し、直に甲信地方に急行し、材木商に、手附金を附し、材木壟斷の策に出でし如く、其機敏神速、人をして驚倒せしむ、范蠡致富の術は、詳細を知るに由なきも、其到る處、富を致せしと云へば、其機敏の働きは、或は大同小異のものならんか、其善く聚め、善く散じ、財物に執着心の淡きは賞すべし。

〔79〕誠 實

孫叔敖

陰德

ワシントン

誠直

○孫叔敖、幼兒たりし時、出遊して家に遷り、憂色ありて食せず、母其故を問へば、泣いて對へて曰ふ、今日吾兩頭の蛇を見たり、恐らくは不日、死するならんと、母曰ふ、今蛇何處に在るや、曰ふ、吾聞く、兩頭の蛇を見る者は、死すと、吾他人の又見んことを恐れ、已に之を埋めたり、母曰ふ、憂ふる勿れ、汝は死せず、吾之を聞く、

陰德ある者は、陽報ありと、徳不祥に勝ち、仁百禍を除く、天高きに處つて卑きに聽く、汝必ず楚に興らんと、長ずるに及んで、令尹と爲り、令名あつて老いて死す。

○ワシントン、幼時遊戯の際、誤つて父の平生愛する所の菓樹を傷殘せり、父外より歸り來り、之を見て大に怒り、誰の所爲なるかを詰問せり、ワシントン、直に父の前に進み出で、己れの爲せしことを陳べ、其罪を謝せしかば、父乃ちワシントンの正直にして人を欺かず、又自ら其心を欺かざるを嘉みして、深く之を賞せしと。

○編者曰く、兩頭の蛇を見て死すとは、一地方の怪談たるべく、敢て取るに足らざる迷信ならんも、少年の心中、他人の見て、其災にかゝらんことを恐れ、之を埋めたりとは、何ぞ心掛の殊勝なる、孫氏母の豫言の如く、後、楚國の高官に上り、令名を以て、終りしと云ふ、ワシントンの場合に際し、大抵の兒童に在つては、私は知らぬと云ふ所ならんに、父の前に進み出で、罪を謝せしは、如何にも殊勝、其自ら欺かざる、正直の行ひは、其身體の成長と共に、美德も増大して、

亞米利加合衆國、第一期の大統領の榮位に上りし大人物たるに因るものか。

(74) 戒 奢

綾部道弘

美衣を禁ず

張知自

奢侈を禁ず

○綾部道弘、自ら節儉に、華飾を喜ばず、嘗て人あり、彩服を其子に遺る、遂に服するを許さずして曰ふ、先君貧素の中に死せり、吾亦辛勤多年、幸に俸資を受け、兒女煖衣飽食す、是れ君の惠なり、夫れ人情は、儉に難くして、奢るに易し、予兒を愛せざるにあらず、奢に習はしむを欲せざるのみと。

○宋の張知自、相と爲り、自ら奉ずること、河陽掌書記の時の如し、所親或は之を規して曰ふ、公俸を受くる少からず、而して自ら奉ずる、此の如し、自ら清約を信ずると雖も、外人顧る公孫布被の譏あり、公宜しく、少しく衆意に従ふべし、知自歎じて曰ふ、吾今日の俸、舉家錦衣玉食するも、何ぞ能はざるを憂へん、顧ふに人の常情、儉より奢に入るは易く、奢より儉に入るは難し、吾今日の俸、豈に能く常にあらんや、

身豈に常に存せんや、一日今日に異り、家人奢に習ふこと己に久しく、頓に儉なると能はず、必ず所を失ふに至らん、豈に吾位に居り位を去る身存し身亡ぶ、一日の如きに若かんや。

○編者曰く、人情儉より奢に入るは易く、奢より儉に移るは難し、今、試みに、一椀の茶、一服の煙草に、就いて言はん、宇治の製茶を、口にせし後に、手製の茶は、喉通り悪しき感あらん、敷島を吸ひたる口に、朝日やパットにては、何か物足らぬ感を起すことならん、左れば儉より奢に入るの易きは、水の低きに就くが如く、奢より儉に入るの難きは、峻坂險路を登るの難儀あらん、綾部道弘の、奢侈の端を開くを恐れしは、上述の道理に基ける教訓にして、張知自の、身丞相となり、昔時、書記たりし時と、同格の清約を守りしは、大に議すべきも、是れ常人に在つては、出来難き所なり。

75 (仁) 恤

仁宗帝

貧民を恤む

フランシス帝

尊貴を忘る

○宋の仁宗皇帝の時、京師大に疫す、帝犀角二株を出し、大醫局に付し、薬に和して貧民に賜ふ、其一通は、天犀なり、内侍留めて、以て御帶と爲さんと請ふ、帝曰ふ、以て朕の帶と爲すは、薬と爲して、民の疾を療すると、孰れぞや、立處に命じて之を碎かしむ。

○埃國皇帝、フランシスは、徳行の君主なりき、首都ウインナに、コレラ病流行せし時、フランシス帝、一人の武官と共に、都府の内外を徘徊せられしに、偶々一の死人を載せたる車の過ぐるに逢ひたり、これを見るに、一人の従ふ者もなし、帝これを怪み、その子細を問ふに、この死は貧人にして、コレラ病にて死せり、其親戚も、病毒の傳染を恐れ、會葬者一人もなきなりと答ふ、帝之を聞き、然らば余等兩人、其代理者となるべし、我邦内の貧民一人たりとも、葬禮を行はずして可ならんやとて、死者の後に跟随して、遠隔の墓地に行き、埋葬を終る迄、冠を脱して、其傍に立ち、慇懃

に葬禮の式を行はれしと云ふ。

○編者曰く、宋の仁宗皇帝の民に施せる、眞に民の父母たりと稱すべく、埃帝フランシス、皇帝の尊貴を忘れて、埋葬の式に列す、聖徳の廣大なる、人をして感泣せしむるに足る。

(76) 獨立心

新井白石

獨立獨行

デヨンブリットン

不屈不撓

○新井君美、號は白石、江戸に生る、幼にして聰慧、三歳字を書き、五歳書を誦す、七歳父母に随つて、演劇を觀、歸つて之を語るに、次序詳密、一も誤らず、父母其前途に望を屬す、夙に大志あり、常に曰ふ、大丈夫、生きて封侯たらずんば、死して閻魔王となるべしと、初め、父に隨ひ久留利の土屋侯に仕へ、二十一歳、共に致仕す、是に於て貧甚し、人或は醫を業とし、又は字を教へて、報を得よと勸むれども、從はず、刻苦して經史を讀む、時に河村瑞軒、富豪にて、藏書多きを以て、就て借覽す、

瑞軒其器を異とし、其孫女に配し、贅婿とし、三千金の邸宅を與へんと欲すれども、肯んぜずして曰ふ、婦の庇蔭により、身の尊榮を圖らば。獨立の精神を妨げ、終身の瑕疵、拭ひ去るべからざるものと思惟し、之を峻拒せしとなり。

後、堀田侯に従ふ十年、志を得ずして去る、貧窶最も甚しく、囊中唯々青錢三百米三斗あるのみ、曰ふ、是れ未だ急に凍餓せずと、意氣少しも撓まず、益々學を勉む、師木下順庵、之を加賀侯に薦めしに、偶々學友の、岡島仲通、老母の加賀に在るの故を以て、己れ代つて、行かんことを請ひければ、白石深く之に譲つて、猶貧困に甘んぜり、後、元祿六年、同じく順庵の薦により、甲府に仕ふ、時に年三十七なり、寶永六年、甲府綱豊、入つて家宣と改め、將軍職を襲ぎければ、白石随つて、幕府に仕へ、終に高祿を賜ひ、筑後守に任じ、從五位に叙せられ其宿志を達したり。

白石、宏才博識、平素勤勉にして、著書多く、一百六十餘種に上る、當時、漢文流行の世なるも、概ね國文を以て書し、世を益すること殊に大なり、其藩翰譜、讀史餘

論、古史通、折りたく柴 記等の史學に關せるもの、東雅、采覽異言、西洋紀聞等の書、今に至るまで之を貴重す。

享保十年五月、享年六十九にして卒す、其自ら肖像に題する詩に曰く、

蒼顏如鐵、鬢如銀、紫石稜々電射人、

五尺、小身渾是膽 明時何用畫麒麟

明治四十年十月、正四位を追賜せらる、

○デヨン、ブリットンは、ワイルトシャアの、燒麵者の子なり、ブリットンの生れし時其父家産を破り、狂疾を發したれば、其伯父の家に寄食せり、其後疾病多きを以て、其伯父、些少の銀貨を與へて、其家を去らしめたり、其後七年の間、種々困難の事に耐へけるが、その自傳に、この事を述べて曰ふ、余嘗て七日に、十八ベンニを以て陋屋を借りしが、其中に在つて、心を學問に縦にせり、冬日の夜、火を具ふるこゝと脂はざるが故に、毎夜臥床中に在つて、書を讀みしと云へり、後ロンドンの酒家に給

事し、曉七時より九時に至る迄、地窖内に在つて、職事を爲しけるが、暗中に閉鎖せられ、且つ勞役過度なりしにより、身體の和を失ひたり、こゝに於て毎七日十五シリングにて一狀師の書記に傭はれ、其閑暇には、買ふこと能はざるが故に古書籍店を閲し、其知見を廣めたりと、二十八歳の時一書を著し、これより五十五年の間、死に至る迄、著述を業とし、世に公にせしもの、八十七種の多數に上りしと云ふ。

○編者曰く、新井白石デヨンブリットンの傳記中には、自助の精神充滿して、躍如たるを見る、其獨立獨行の士、不屈不撓の丈夫たりしは、共に同じく、多くの著者に富めるも亦同一なり、白石曾て、富豪の爲に知られ其女婿として、財産分與の談あるに逢ひ、婦の庇蔭により、尊榮を圖るは、終身の瑕疵と爲し、峻拒せしが如きは、今日の風潮に見て感如何。

(77) 壯士

平景政 勇武

樊噲クワイ

勇壯

○平景政、權五郎と稱す、勇武を以て顯はる、年甫めて十六、八幡太郎義家に従ひ、仙北金澤の柵を攻むる時、衆に先つて進む、敵射て、景政の目に中つ、景政自ら其矢を折り、遂に敵を射て之を斃し、胄を脱して仆す、矢猶ほ目に在り、三浦爲繼、之を抜かんと欲し、足にて其面を踏みしかば、景政刀を抜き、爲繼を刺さんとす、爲繼驚き故を問ふ、景政曰ふ、命を鋒鏑に隕すは、士の甘んずる所、生きて面を踏まる、汚辱是より甚しきはなし、汝を刺して死するに如かずと、爲繼乃ち跪きて之を抜く。

○樊噲は、沛人なり、漢高祖に従つて、天下を定め、功を以て舞陽侯に封ぜらる、初め帝、已に關中を定めし時、項羽怒り、帝を攻めんと欲す、帝百餘騎を従へ、羽に鴻門に會す、亞父范増、項壯をして、劍を抜いて、舞はしめ、間を得て、帝を撃たしめんと欲す、羽の叔父項伯、帝を護して、常に之を屏蔽せり、噲、事の急なるを聞き、盾を持って、直に入り、怒髮冠を衝き、目眦裂けんとするの狀あり、羽之を壯とし、賜ふに卮酒巵肩を以てす、噲、酒を飲み、劍を抜き、肉を切り之を食ふ、羽曰ふ、能

くまた飲まんか、噲曰ふ、臣死をも辭せず、斗酒何ぞ辭するに足らんやと、因つて有功の人を害せんとするの非を論じて、羽を面折せり、帝廁に行き、噲を麾き、騎馬して軍營に歸れり、此日噲なかりせば、幾んど殆かりしと。

○編者曰く、和漢の古今に涉り、壯士中、眞の壯士とも云ふべき者は、平景政權五郎と、樊噲とを推すべし、景政戰場にて、敵の射撃を受け、少しもひるむ色なく、其矢を折つて、敵を斃し、味方の看護者の無禮を憤りて激怒し、壯士の本色を發揮せり、樊噲、鴻門の會に演ぜし活劇は、恰も赤鬼 活畫圖の如しと評すべし、近來、壯士の名を聞くも、壯士の勇なく、只多數を頼みとする假面を蒙れる似非壯士に過ぎざるのみ。

(78) 虛心坦懐

王旦

宏量

モニツク

雅懐

○宋の王旦、平生未だ嘗て、其怒を現さず、飲食に不潔の者あれば、但く食はずして

止む、家人其量を試みんと欲し、塵埃を以て羹中に投ず、旦惟飯を啖ふ、問ふ、何を以て、羹を食はざる、曰ふ、偶々肉を喜ばず、一日又其飯に墨して進む、旦之を視て食はず、曰ふ、偶々飯を喜ばず、子弟旦に訴ふる者あり、曰ふ、食肉、庖人に私せらる、之を治すべしと、旦曰ふ、汝輩肉を食ふ、幾何なりと思ふや、曰ふ、一斤半にて足れり、旦曰ふ、この後人毎に一斤半と定めば可ならんと、其人の過を發かざること、類ね此の如し、旦相と爲る時、寇準樞密院に在り、數々旦を誘る、旦、専ら準を稱す、眞宗帝、旦に謂つて曰ふ、卿其美を稱するも、彼は専ら卿の惡を談ず、旦曰ふ、理固より然るべし、臣相位に在る久し、政事缺失必ず多し、準、陛下に對して隠す所なし、益々其忠直を見る、是れ臣が準を重んずる所以なり、帝是を以て愈々旦を賢なりとす。

準罷めらるゝに及び、人に託して旦に語り、使相たらんことを求む、旦驚いて曰ふ、將相の任、豈に求むべけんや、吾は私請を受けず、準深く之を憾む、已にして準を、武勝軍、節度使、同中書、門下平章事に除す、準入つて見ゆ、謝して曰ふ、陛下

臣を知るにあらずんば、安んぞ能く此に至らん、帝具さに、且が薦むる所以の者を云ふ、準愧歎して及ぶべからずとす。

○露國のモニツクは、性極めて寛宏の人なりし、嘗て宰相たりし時、人の讒に罹り、死罪に行はれんとせしが、遂に宥されて遠地に流され、二十五年を経て、再び召還せられ、舊職に復任せり、前に讒せし者、此事を聞き、彼若し還らば、我に報ゆるに、如何なることを以てすべきやと、甚だ憂苦せしが、已むことを得ず、其歸るを邀へ、道の側に跪きて、昔日の罪を謝し、且つ哀を乞ひしかば、モニツク、其人に向ひ、我心をして、汝の心の如くならしめば、必ず怨を報ゆることあるべきも、我は大に汝と異なれば、決して恐怖心を懷くなかれと言ひしと。

○編者曰く、怨に報ゆるに、徳を以てすとは、君子の徳を稱することなるが、度量洪大の人にあらざるよりは、王且、モニツクの如き眞似は、容易に及ぶべくもあらず、寇準、常に且を帝に譖するも、且は斷えず準を稱する如き、是れ人の能く

し難き所とす、モニツク、讒者の爲に、遠謫せられ、配所の月に呻吟すること、二十五年の久しき、赦に逢ふて歸るや、敢て眞の仇讎たるを忘るゝ者の如し、眞に天空海潤の量と稱すべし。

(79) 苦學

荻生徂徠 専心精讀 フランクリン 力行苦學

○荻生徂徠は、江戸に生る、父方庵、幕府の醫官たり、延寶中、事に坐して、上總に流され、徂徠亦之に従ふ、時に年十四なり、學を好めども、書と師友となし、僅に大學諺解一本を、父の篋中に得て、之を讀み、反復翫味して、熟通精透し、二十五歳、赦に遇ひて江戸に還るの時、業殆ど大成せりと云ふ、蓋し天性慧敏なるが上に、勉強忍耐、卓絶せしが爲なり、即ち書を讀むや、日暮るれば簷際に出で、簷際暗くなれば、入つて燈火に對し、晝夜寸時も、手に卷を釋つるの時なく、正月元旦にも、亦蓬髮垢面、平然として、書に對したりと。

徂徠嘗て、芝に寓して、書を講ずるに、貧甚しく、衣食給せず、増上寺の前に豆腐屋あり、其貧にして志あるを憐み、毎日豆腐の滓を贈つて之を恵みければ、後、俸祿を得るに及び、日に米三斗を贈つて、昔日の恩に報じたりしと云ふ。

徂徠常に稱して曰ふ、蕃山の知、仁齋の行、予の學、之を合すれば、東邦始めて一の聖人を得と云へりと。

○フランクリン、幼時家貧しきを以て、蠟燭を賣るを業とし、暇あれば學問に志し、寢食を廢するに至れり、後、印刷の業を學び、四方に遊び、ヒラデルヒヤ府に至りし時、囊中只銀錢一元を餘せしが、客舎に居り、日に蠹食を喫し、僅に飢腸を療せり。

一日、婢來つて錢を増さんことを請ひければ、フランクリン笑つて曰ふ、吾増すべき錢を持たず、願くは更に給養を薄くせよと、其後、日に蠹食に甘んじ、意氣自若として、毫も屈撓の意なく、勉學止まざりしと。

北米合衆國、獨立の時、フランクリン、至大の勳勞ありしを以て、崇高の職に居りしが、常に自ら其功績を成したるを、才能知辯に歸せずして、其品行の信實なるに歸せり、故に其言に曰ふ、予只品行信實なるを以て、我國人に重んぜられたり、予言語拙惡にして、一句を言ひ出すにも、多少の採擇を費せり、然れども我志の向ふ所のものは、常に能く行はるゝことを得たりと。

○編者曰く、我國、學者中の巨臂たりし、荻生徂徠は、貧困に成長せし人なり、年十四、父の流謫に従ひ、上總に赴けり、父の筐底に、一部の大學諺解ありしを見て、専心精讀し、倦むことを知らず、二十五歳赦に遇ひて還るや、學業大成の域に達し居りしとは、一は敏慧の資によると雖も、一は其熱心勉勵の功によらずんばならず、其芝に居りし時、豆腐屋主人より、豆腐滓の恵みを受け、空腹を支へしが、後業成るに及び、厚く昔日の恩を謝せしとは、一の美談たるを失はず、米國獨立戰爭の際、大功を立てし、フランクリンも、貧家の子にして、蠟燭の小賣

商なりしが、暇あれば、學問に志し、寢食を忘るゝ熱心家なりき、偶々旅館にて、食費に窮し、食料を減じて、粗食に甘んじたりしとは、熱心の度想ひ見るべし、要するに、古今獨歩の大儒となりし徂徠や、米國獨立の元勳元老となりし、フランクリンの生立、艱難汝を玉にすとは、眞なる哉。

(80) 無欲

許由

洗耳

デモスセネス

曝背

○支那、上古史に云ふ、昔し帝堯、勤に倦み、子の丹朱、不肖なるを以て、位を賢者許由に譲らんと欲し、其意を通ぜしに、許由、五月蠅きことに思ひ、厭ふべき俗事の我が耳を汚がせしとて、潁川の流に至り、其耳朶を洗淨せりと。

○希臘の哲學者デモスセネスは、世に犬儒と稱せられたり、これ其生活状態の、犬に類せしより、起りしものならん、常に壹個の桶を、棲處とし、居を轉ずる時は、桶を回轉して、太陽の光線に浴し、桶内に起臥せり、或時アレキサンダー大王、之を氣の

毒に思ひ、其傍に尋ね來りて、朕は、卿の望む所のものを給して、便宜々與へんと欲す、如何と、デ氏つくくくと大王を眺め、答へて云ふ、予は今背を曝らして、暖を取れり、光線を遮つて、予の暖を奪ふことなければ、充分なりと返答せりとなり。

○編者曰く、世に云ふ、黄金世界なるもの、眞にあるものとせば、許由、犬儒の如き、無欲恬淡の士は、蓋し黄金世界の人物なるべし、この輩に向ひ、試みに今日の人生觀を問はゞ、營々たる戲蝶狂蜂と同視するかも計られず、斯る奇人の所作、教へと爲すに足らざるは、勿論なれども、世には收賄の授受とか、又は横領罪杯に問はるゝ人多き中に在つて、この風を聞かしめば、或は一服の清涼劑ともならんか。

(81) 高遠

荷田春滿

古學の復古

ヘンリーグレイ辯論の練習

○荷田春滿は、東滿又は東磨と稱す、京都稻荷山の宮祠、羽倉信詮宿禰の子なり、夙

に祠務を弟信名に譲つて大に國學を唱へ、復古を以て、自ら任とす、古史を究めて一家言を立て、又律令格式に精しく、以て後學に授く、世に羽倉學とて、一時大に行はる、將軍吉宗、其名を聞き、之を召す、老を以て辭し、請ひて京師に國學院を起すの許可を得、地を東山に相し、果さずして歿す、識者之を惜む、春滿品藻高雅、中世以降の和歌、多く淫靡なるを慨し、自ら戒めて、生涯戀歌を賦せざりき。

○米國の辯論家、ヘンリーグレー嘗て少年に向ひ、自己の業を成就せる秘奥を語つて曰ふ、余二十七歳の時、始めて辯論の士と爲らんと志し、これより毎日史書學術書の類を或は讀み、或は談じ、多年の間これを勉めたり、或時は穀田に於て、或時は樹林の中に、或時は偏隅の廐房に於て、辯論を學び、牛馬を以て聽者と爲せり、この起初の練習に頼つて、後來の運命は、造り出されたりし。

○編者曰く、羽倉學の祖、荷田春滿は、國學の復古を以て、任とせし人なり、京都東山の地に、國學院を創設せんとし果さずして歿せしは、世人の遺憾とする所なり

き、春滿、中世以降の和歌多く淫靡なるを慨し、生涯戀歌を賦せざりしは、一見識の士と稱すべし、米國のヘンリー、グレー自己の成業せる秘訣を語つて云ふ、我が辯論術の練習は、隨處みなこれ學習の伴侶と爲せしと、西語に世界は大學校なりと真に然り。

(82) 勤勞の報酬

伊藤仁齋

古學を唱ふ

ジエームス、ワット

汽機を創す

○伊藤仁齋は、京都商賈の家に生る、幼時書を讀み、儒を以て一世に雄飛せんと志を起し、刻苦學問す、家人學問の營利の家業に迂なるを以て、之を止め、或は醫たらんことを勸むれども、孰れも肯んぜず、宿志を固持し、三十七八にして、宋儒の説を棄て、一家の見を立て、古學を唱ふ、實に同學派の開祖なり、學徳共に一代に超絶し、天下の學者、四方より群集し、之に歸す、門に及ぶもの數千人、日本六十餘州中其門人なき者、唯、飛驒、佐渡、壹岐の三州なりしと。

仁齋、篤實溫恭にして、善く物を容れ、小事も忽にすることなし、比隣共同の義井を深ふを見、自ら出でて、其勞を分ちし云ふ。

或時仁齋、夜行して山賊に逢ふ、賊五六輩、劔を按じて錢を求む、仁齋神色自若として、賊の職業如何を曰ふ、賊劫奪を業とし以て自ら給すと、仁齋曰ふ、職業とあらば、止を得ざるべし、我何ぞ拒まんやとて、服を脱ぎ之を興へ去らんとするに、賊曰ふ、我輩盜を爲すこと數年なるも、未だ舉動の貴客の如き者を見ず、抑々客は、何人ぞ、曰ふ、儒者とは何事を爲す者ぞ、曰ふ、人道を以て人に教ふる者なりと、因つて人道の何たるを辯説し、諭せしに、賊皆頓首涕泣して、罪を謝し、改心して良民となりしと云ふ。

○ジェームス、ワットは、スコットランドの人にして、蒸汽機器を創造せし大家なり、其平生の行跡を観る時は、絶大の事を爲し、絶高の功を收むる者は、天資大氣力あり、大才思ある人にあらずして、絶大の勉強を以て、極細の工夫を下し、許多の經

験によつて、技巧の智識に長ずる人にあることを知らるゝなり、ワットは、幼年の時、玩弄の具を作ることに巧みに、其父は木工にして、其店に測量器具ありけるが、之に因つて視物學、及び天學の門戸に導かれたり、其身多病なりしが、之に因つて、生物體質の學に意を用ひ、其深奥に達せり、又常に野外に散歩せしが、之を時として、草木の學に意を留め、後又機會に觸れ、音韻の學に通ずることを得たり、其後グラスゴウの學校よりニューカミンの作れる蒸汽器の修補を托せられければ、ワット之に因つて、前人の發明せる所の熱の作用、及び蒸汽の張縮する所以の理を講究し、又同時に機器創造の法を研究し、困苦勉強久うして怠らざりしが、遂に蒸汽機器と云へるものを造出せり。

ワット、この機器を造り出せる迄、許多の星霜を経、更に工夫を怠らざりしが、其間家人を養ふ爲には、測量器機を造つて之を賣り、絃弓笛及び樂器を作り、道路の修繕を監視し、水道の築作を掌理し、これ等の事を爲し、正當の資を得て生活を營めりと

云ふ。

○編者曰く、伊藤仁齋は、商賈の家に生れしも、其業を欲せず、儒を以て世に立たんと志し、刻苦勉學す、人其學問の營利に妨げあるを以て、之を止むるも聞かず、積年の勉勵は、遂に古學派の開祖となり、學識德行、並び高く、四方徳を慕ひ、來り學ぶ者多し、其山賊を良民と化せしは、一の美談として永く傳ふべし。

英國のジェームス、ワットの蒸汽機器の發明は、世界の大勢を一變せる大發明なりしなり、即ち海に汽船、陸に汽車を走らして、世界を縮少し、其他汽器によつて百般の物産を増殖し、人民の産業を豊富にせし福利は、勝けて計るべからず、嗚呼一個の智囊より世界萬國を利し、其惠を蒙らしむる大恩人ワット其人の如き文勳は古來赫々たる英雄豪傑に比し百千萬倍なるべきに世人尊敬の念、文に薄くして、武に厚きは、只腕力の重んずべきを知つて智力の重んずべきを知らざるは數ずべき哉。

大正十一年十月一日印刷
大正十一年十月四日發行

おのがかどみ奥附

價一金壹圓五拾錢

著 者 寒 澤 振 作

發 行 者 兼 印 刷 者
東京市京橋區銀座一丁目廿二番地
大日本圖書株式會社

右代表者

專務取締役 宮 川 保 全

不 許 複 製

發 行 所

東京市京橋區銀座一丁目廿二番地

大日本圖書株式會社

郵便振替貯金口座 東京二一九番

503
147

終